

神を哲学した中世 ヨーロッパ精神の源流

八木雄二 (新潮選書 2012).

はじめに

4 神学とはキリスト教信仰を前提とした哲学であり、キリスト教信仰を持って生きる世界とは何かという問いに答えようとする考察である。

信仰を持てば、世界の根拠となる原理は「生きている神」である。一方、近代科学を持てば世界の原理は原子や素粒子である。中世ヨーロッパではまさしく神が世界の原理であると考えられていた。それは現代の私たちが精密科学の客観性を信じているのと全く同様に、疑いようもないことであった。

神学は神を原理とする世界についての学問であり、神について人間が近づくことができる範囲での学問である。

5 「神」を「最も普遍的なもの」や「最も客観的なもの」あるいは「世界の原理」といった言葉で置きかえて読んでいい。

「ヨーロッパ精神が作られたのは中世であって古代や近代ではない。古代から伝えられた哲学とキリスト教がアルプスの北側(ゲルマンに蹴散らされ蹂躪されたケルト世界)で作った世界こそ今につながるヨーロッパなのである。

6 中世哲学をよく知っていれば近代哲学は要らないとさえ言える。ハイデガーは中世直系である。

I. 中世神学に近づくために

16 古代ローマ語のアルプスの北の開拓はキリスト教会による布教活動によって進められた。それはアイルランドから始まりブリテン島に移りフランク王国が力をもつ大陸へと進んだ。

19 「ある様式を備えた祈」という人目にも顕著な姿こそがキリスト教である。中世におけるキリスト教信仰とは「心の姿」と言うよりも、むしろ「一定の秩序を守った祈りの行動」である。

24 ヨーロッパ中世とは西ヨーロッパが古代ローマの文化に触れ始めた九世紀に始まり、西ヨーロッパが文明の発展をはじめた11世紀に明確になり13世紀から14世紀にかけて人々が「この世の終わり」を強く意識するような時期に終わる500年間である。

27 12世紀が終わる頃突然アリストテレスがヨーロッパに現れた。ヨーロッパの知的状況は12世紀と13世紀以降の100年間ですっかり様変わりした。

29 12世紀初期のギリシア・ローマ哲学を伝えたのはアウグスティヌスとボエティウスであった。後者は「普遍論争」を知識人の間にもたらした。

31 普遍論争は「全体と部分」「一と多」の論であり、神と被造物の関係は「一と多」の関係なのである。

これと「より大とより小」の三つの対はプラトンが「パルメニデス」で示した哲学分析の道具である。

34 人格神の信仰を持つ世界では道德の根本は「我と汝」の関係を結んだ神の命令となっている。つまり人格神の信仰を持つ地域では信仰を持つことと道德を持つことは同一視されがちである。そのため無信仰は一般に不信を生じる。

46 ヨーロッパの哲学は古代からの伝統として、目に見えない精神性を重視する姿勢を文明人の自負として傲慢なほどに持っている。しかもその精神性は、繊細な感覚や深い感情を誇るものではなく、幾何学的図形による証明や、反論しがたい形式論理を駆使する理性を誇るものなのである。

48 人々が抱く精神世界は、神や天使が居るはるか天空の世界から地上の人間理性がもつ認識へ、つまり上から下へと、しっかりとつながっているのである。

これは紀元後三世紀に新プラトン主義の哲学、あるいはアンモニオスとプロティノスの哲学が作り出したと言われる世界構造である。「善かつ一者であるもの」(最高善であるとともに一つ)という最上位の存在から流れ出した存在の流れが、いくつかの段階を経て人間の魂に流れ込み、人間理性はこの存在の流れの中であって、身体を通じて物体との間を取り持っていると言うのだ。

2. キリスト教神学の誕生 アンセルムスの世界

56 アヴィセンナ(980-1037)は神が被造物に与える「存在」を被造物の本質とは区別しその上で神が創った世界の存在の全体を論じた。つまり神によって創られる世界の「本質」はいまだ可能態に過ぎず、現実態として神から別に「存在」を与えられてはじめて被造物は現実に存在するようになると彼は考えた。

57 中世のすえになぜ神学は衰退したのか? 根本的理由が二つある。あまりに崇高すぎること(無限)およびペルソナ(人格的主体性)をもち限りなく自由であること。言いかえると必然性と普遍性によっては確定しがたい存在であったことである。

60 近代科学はその技術的恩恵を受けた人々はその真理性をその生活実感において納得するしかない。

しかしこの種の科学は人間の人生全般に関わる重大事(精神的に貴重なこと)には、ほとんど関わることができない。

69 アンセルムス「神はなぜ人間となられたか」受胎受肉、受難、は合理的に説明できるのか? アンセルムスはこの疑問に答えることによって神学を始動させた。しかし答えようとした異教徒は兄弟的な宗教の信者であった。これは中世の哲学がもっている限界であった。

本来、哲学は無前提を表明する。その点で旧約聖書の内容を前提とするアンセルムスには真の哲学とは言いがたい限界があった。

3. 地上の世界をいかに語るか トマス・アクィナス「神学大全」

80 キリスト教が教える美德は人間が相互に訓え合うものではなく、神から与えられる賜物である。
幾何学的真理に満ちている天上世界のイメージはきわめて堅固な世界観を中世において形成した。

85 精神性と物質性がことなつた次元にあると考えられるなら、両者に共通のものがなければ、一方が他方に影響を与えることはできない。

86 デカルトは、魂の働きと身体の働きの接合について現実に苦悩して、魂の働きが脳の一部である「松果腺」を通じて身体に伝わると主張した。神学も市場経済の荒波をかぶって凋落したのである。

94 新プラトン主義では上位の存在は摂理に支配されているが、下位の存在(劣った物的存在)は運命的であつて偶然的な事態に翻弄されていると見られている。

これに対してキリスト教世界では、神が宇宙を創造して統率し、完全に宇宙を支配している。神が立てた計画は完全である。したがつて天使が墮落して悪魔になつたことも、物的なものに偶然的作用があることも、たとえ人間には理解できないとしてもそこには何か理由があつて、神の摂理に取り込まれている。つまり、人間にとって一見偶然的で不完全にしか見えない事柄でも、実は神から見れば完全だと説明されるのである。

95 トマスにとって宇宙の秩序は、神という目的認識ないし、神を目的とする運動(愛するものが愛する相手に向かう運動)に従ふことによって生じる秩序である。神が外から形式を押しつけるような強制によって秩序が生じるとは考えていない。神が外から押しつけるのは、むしろ奇蹟などの特殊な場面である。したがつて、世界のなかにおおむね一定の形式が見えるのは、神の愛の統率があることを証明している。

しかし愛とはいえ、神の統率は絶対的なものである。それゆえ、神の意図から外れて物事が生じることはありえない。したがつて、「はずれて見える」のは真実に「はずれている」のではない。人間からすればはずれて見えるものも、じつは人間の把握できる時間を超えた秩序のうちで、つまり神の目から見れば、何らかの知られざる仕方で欠落が補われるという理解なのである。

98 トマスの神学は主知主義の神学である。主知主義とは知性とか理性と呼ばれる認識能力が人間の持つ意志という主体的実践能力が働くまえに対象を認識して意志が自由に働くことができる場をあらかじめ用意しているという思想である。これに対して主意主義とは、意志自体が認識と独立して「自由に働く」能力であるとする思想である。つまり理性は認識を単純に持つだけであつて、それを自由に用いるのが意志であるという思想である。

100 主知主義のトマスによれば、自然の働き(自然の秩序)という、神の恩寵が関与しない領域には、すべてのものに対して「一つの神」が居るのである。しかしながら、各人の理性において、神の恩寵を受けて自由を可能にする領域には、各々の理性に「異なる姿を見せる神」がいる。すなわち、一方は「自然本性的神」であり、他方は「自由を生じさせる神」である。この二つの神は、一人の理性に対しては「同じ神」として現れる。そのため、トマスとて神は二つだとは言わない。とはいえ、彼によれば、神は一つでありながら、理性には二重に見

えている。

102 トマス自身は二重に見える神を「自然本性的な存在としての神」と「超自然本性的な対象としての神」と呼んで区別する。そして後者はその恩寵、言いかえると愛によって、あるいは信仰心を照らす超自然本性的光によって、理性に働きかける神だと述べている。異なる人には異なる神の恩寵がありそれぞれ異なる信者の心にはそれぞれ異なる神の姿が各瞬間に生じている。これが人間に自由を与えると同時に神への背反の可能性も生じさせる。中世においては教会は必ずしも統制を行っていない。トマスの議論がその根拠になっている。

4. 神学者が経済を論じるとき—ドゥンス・スコトゥス「オルディナチオ」

109 自然の中の原因がもつ必然性は、その直接の結果を必然的に生じるが、その必然性を自由に創った神から見れば、その結果は神のなした自由な結果、つまり偶然的な結果なのである。

スコトゥスは神の自由を志向の自由として規定する。神の似姿である人間も意志によって、いくらかは神と同様に、必然を自由に用いて生きていると考える。この主意主義は近代科学に受け継がれ技術の急な利用による自然支配が進められることとなった。

110 摂理に関してはスコトゥスの考えは新しいものだった。絶対的自由をもつ神の意志は将来にわたるすべてをあらかじめ決定しているのではなく、むしろ過去から未来まで、どの瞬間いずれの場合にもただその都度自由に決定する力をもっているだけであると考えた。神の決定力は善悪無記である。どの瞬間にもいずれかが決定されていくが可能性はいつまでも残り。たとえ現実に起きたことがいずれか一方であってもそれが偶然であることはいつまでも神の意志の前に変わらずにある。現実に起きたことは、二つの可能性のうち偶然にも一方であっても、それが別の現実であった可能性は、神の意志の前でつねに残る。つまりたとえ起きたことでも実は決定されていないということである。最終的決定はこの世の終わりの後の最後の審判までのこされる。

111 スコトゥスは時間の中の世界について神が絶対的自由によって関わることを仮想した。誠実に生きながら運命のうちで悲惨な一生を送らなければならなかった人にとってこの可能性は魂の救いになる。

可能世界論はもともとは神の自由意志の問題であった。

5. 中世神学のベールを剥ぐ

152 普遍がものとして実在していると考えるのが中世の常識であった。神の存在問題は普遍の存在問題だった。

163 「抽象」という言葉の意味は古代中世と近代以降では全く異なる。その意味は中世の終わりに変化し、形而上学にその意味を失わせ神学が同時代的意義を失った原因と言えるだろう。

当時の常識は実在論 (普遍は心に抱かれた概念の名前ではなくそれに対応するものが心の外に、高い次元に、目に見えない仕方実在する) であり現在のような唯名論 (普遍は心に抱かれた概念につけられた名前以上ではない) ではなかった。

166 法則は普遍性を体現するから中世人から見ればそれを実在するあるものの形相として受け取るであろう。[C] reificationism の裏返しか。□

現代の考え方では法則は物ではない。法則は客観的であるという意味では実在といえるが、「もの」が実在するように「法則」が実在しているとは考えない。客観的ではあるが物ではない。

167 近代科学では小さなものの集まりのみをもとにどれほど大きなものでも理解できる。特定の唯一のものがすべてを動かしているのではない。中世では宇宙のような大きなものでも神は無数の能力ですみずみに到るまでマメに仕事をしている、と見られていた。このように宇宙についてに一般的理解が中世から近代に掛けてパラダイムシフトした。

169 中世の人々は普遍を「現実に広く力を及ぼすもの」と考えていた。普遍は実在世界において捉えられていた。近代科学では普遍は実在でなく抽象的である。